
Scientific Approaches to Language No.6 March 2007

はしがき

神田外語大学大学院言語科学研究センター（CLS）の2006年度における研究活動の成果の一端として紀要の第6号を刊行いたします。

CLSが支援している研究活動は、本学大学院博士後期課程における研究分野とも呼応しますが、大別すると、理論言語学に通じるものと言語教育学に関わるものです。前者は、井上和子CLS顧問を中心に、CLS研究員、非常勤研究員、院生を含めた定期研究会において、様々な角度から理論研究、記述研究を追求し、言語学関連研究会も開催しました。後者についても、英語教育レクチャーや早期英語コロシアムを開催しましたが、それらは、継続中の以下の2つの公的補助金によるプロジェクトの遂行と関係しています。（2006年度のCLS主催による研究会については、巻末のコロシアム報告参照）

一つは、日本学術振興会科学研究費の補助金（基盤研究(B)）による小林美代子教授を研究代表者とする3年間のプロジェクト『早期英語教育の指導者養成及び研修の実態と将来像に関する総合的研究』（研究分担者：長谷川信子、堀場裕紀江、他）で、今年度がその最終年度となり、集大成としての報告書が刊行されます。（巻末の研究成果報告を参照してください。）もう一つは、科学技術振興事業（JST）社会技術研究事業の公募型研究領域〈脳科学と教育II〉に採択され、2004年12月に発足した他大学との5年間の協同研究プロジェクト『言語の発達・脳の成長・言語教育に関する統合的研究』（研究リーダー：萩原裕子、首都大学東京）で、CLS（研究代表者：長谷川信子／研究分担者：井上和子、小林美代子、堀場裕紀江）では、そのサブ領域の「言語能力検査・評価」を担当し、応用言語学、理論言語学の知見に基づき、早期英語教育のための語彙リストを編纂し、それを基盤とした、独自の言語テストの開発、施行、および分析を行っています。その成果と中間報告は、今年度、国内外の学会で発表しましたが、残念ながら、本号には含むことができませんでした。

本号に収められた論文は、上記の活動を反映するもので、言語学関係では、藤巻、長谷川、井上、神谷、上原の論文が、言語教育関係では、小林・宮本の論文が収録されています。また、斎藤の論文は言語文化学に関するものです。

まず、言語学関連の論文ですが、いずれも、統語構造とそれに関わる語彙的意味、語用的意味など、いわゆる「統語論との境界現象」を扱い、理論構築と現象記述の両面に新たな観察や分析を提示しています。「統語と語彙的意味」との関わりで、藤巻が日本語の慣用句を、神谷が英語の-able形容詞を扱っています。藤巻論文では、慣用句の一部を成す目的語の移動可能性の観点から、統語と慣用表現の解釈の関係を討議し、移動先となる統語的位置が文全体の意味とどのように関わるかを検討しています。神谷論文は、英語の-able形容詞の派生に課せられる制限をケース・スタディとして、語彙概念構造と統語構造、さらには音韻構造との関係を探っており、視野の広い力作です。「統語構造における機能範疇の意味と機能」に関しては、長谷川と井上が扱い、長谷川論文では英語の-enや日本語の「られ」といった受動形態素をlittle-vの一種とみなし、その格と外項に関わる素性から異なるタイプの受動文が派生されるとの分析を提示しています。井上論文は、昨年度の紀要（第5号）の論文をさらに発展させ、主文のモーダルと条件節との関係を主文のモーダルと関わるCPシステムの選択制限として捉える分析を提示しています。また、上原論文では、授受補助動詞の「ていただく」が持つ謙讓と尊敬という語用的機能に着目し「統語と語用の接点」の問題として興味深い観察を行っています。

英語教育関係では、上述のように、『早期英語教育の指導者養成及び研修の実態と将来像に関する総合的研究』の研究報告書が刊行されることもあり、本紀要には、小林・宮本による論文1編だけの掲載となっていますが、そこでは、早期英語教育に最も重要と思われる教師に求められる資質について、早期英語教育に携わる教員に対する意識調査の結果を踏まえて考察しています。

斎藤の論文は、英語文化圏における引用句辞典に収録された引用文から、その「誤った引用」も含め、そこから見えてくる言語表現と言語文化学・文献学との関わりを考察しています。

上述したものを含めCLSでの研究活動は、CLSが本学大学院言語科学研究科の付属施設であることから、大学院専任教員がその活動の中心となっていますが、実質的な多くの研究と作業は、CLSに籍を置く、研究員（専任）の神谷昇さん、非常勤研究員の藤巻一真さん、宮本弦さん、大倉直子さん、上田由紀子さん（2006年8月まで、現在は、秋田大学教育文化学部・助教授）、上原由美子さん、綿貫啓子さん、研究補佐

員の森真理子さん、事務補佐員の椎名千香子さん、そして多くの大学院生、研究生、修了生によって遂行されています。心より感謝しています。

そして、本号の刊行は、神谷昇さんと椎名千香子さんの献身的な働きのお陰で可能となりました。本当にどうもありがとう。

2008年3月
言語科学研究センター・センター長 長谷川 信子

藤巻 一真 慣用句における移動と解釈の問題

本稿では、慣用句における移動（特にかき混ぜ規則）と解釈に焦点をあて、意味的考察(宮地(1982), 国広(1985), 中村(1985))をもとに、新たな観察を提示しながら、何故、慣用句には移動の可能なものと不可能なものがあるのかについて考察する。かき混ぜ規則は、意味変化を生じさせないものであると仮定されているが(Saito (1989))、では、何故、かき混ぜによりその一部を移動すると悪くなる慣用句とそうでない慣用句があるのかが基本的な問いとなる。この問いに対して、かき混ぜによって移動された要素（主に名詞句）の意味解釈と、移動元に残されたコピーの名詞句の意味解釈の差が解釈上の問題を生じさせているのではないかという答えを、一つの可能性として、提示する。

長谷川 信子 日本語の受動文とlittle vの素性

受動文は、生成文法の初期から、理論の変遷と共に常に考察されてきた構文であり、それだけ、統語理論のあり方の本質に関わる現象と言える。受動文の分析は、GB理論においては、名詞句移動と格の関係について大きく理論的發展に貢献したが、語彙情報と統語構造の関係がGB理論ほど明確でなくなったミニマリストの枠組みにおいても、再度検討される必要がある。本論文では、GB理論の枠組み内で提示されたHasegawa (1988)の受動文の分析を、受動述語を機能範疇の一つと捉えて、そこでは扱うことが難しかった所有受動文も含め発展させる。日本語の4つの異なったタイプの受動文（直接受動文、間接受動文、所有受動文、尊敬受動文）は、Hasegawa (2001, 2004a, 2004b) の「機能範疇には[±外項][±目的格] 素性の組み合わせの違いにより異なった4つのタイプが存在する」との主張から、その存在が予測でき、その構造と派生が説明できることを示す。

井上 和子 日本語の主文のモーダリティと条件節

本論文では、時制辞のモードとして「認定」を仮定し、意味と統語の両面からこの仮定に根拠を与え、これを基に条件節の意味として「仮定条件」と「実現前提条件」に分けた。時制辞を持たない「ば」条件節は、「認定」のモードを欠いているので、主文のモーダルからの制約を受けないと仮定した。この仮定が予測どおりであることを示した上で、「ば」条件節が実現前提条件節の文脈に現われ得るかどうかを、検討した。その結果、仮定条件を表わす条件節と実現前提条件を表わすものは、互いに相手の環境に生じしえないことが分かった。これにより、従来の研究では、個別の制約とされていた制約を一般化することができた。さらに、「と2」と「なら2」が主文のモーダルに制約されるのは、これらの形式がそれぞれ持つ意味と異なる条件表現が要求される環境において起こる制約であることを明らかにした。形式を手がかりにした分析の可能性を示したものである。

神谷 昇 英語の接尾辞-ableについて：語彙意味論と統語論の関係を探る

本稿は、動詞に接尾辞-ableを付加することにより派生される形容詞（-able形容詞）に課せられる制限を語彙概念構造(Lexical Conceptual Structure)と項構造(Argument Structure)の観点から分析し、その派生には事象の抑圧(Kageyema (2002))と事象の卓越化が関与していることを提案する。また、-able形容詞の統語構造についても検討し、-ableの統語構造における位置はそのクラスと密接なかわりがあることを論ずる。最後に、語彙意味論的分析と統語的分析を統合し、LCSと統語構造の関係について検討を行う。

小林 美代子・宮本 弦 早期英語教育実践者の指導者観

公立小学校への英語教育導入について活発な議論が交わされる中、誰が教えるのか、指導者の養成はどうするのかという問題については十分に議論がなされているとは言い難い。本稿は、日本学術振興会科学研究費補助金を得て平成16年度より行っている研究プロジェクトの一環として実施した、民間の児童英語教室指導者172名を対象とする意識調査の結果を報告するものである。指導者たちの経験年数、保有資格、英語運用力、望まれる指導者像、指導者養成・研修プログラムに必要とされる項目に関する意識について、調査結果を報告し、今後の指導者養成・研修プログラムの枠組み作りへの示唆を考察する。

齋藤 武生

言語文化研究ノート — 「引用」をめぐる問題—

本稿は、英語文化圏における引用句辞典に注目し、そこに収録されているいくつかの引用文を言語文化研究の視点から論じたものである。第2節では、イギリスの言語文化の例として、ネルソンのことばをめぐる問題を論じたが、ここでは「引用(quotation)」と同時に、「誤った引用 (misquotation)」の問題についてもふれた。第3節では、「アメリカを創ったことば」の視点から、言語文化遺産としての引用文の問題を見た。

本稿がめざしたのは、「引用」をめぐるいくつかの問題について、通時的・文献学的研究のあり方を探る作業であった。

上原 由美子

「ていただく」の機能 — 尊敬語との互換性に着目して—

授受補助動詞の一つである「ていただく」は、それ自身は謙譲語であるが、相手を上に自分を下に位置づける関係において相手の行為を表すという点で、尊敬語と共通する機能を持つ。本稿では、益岡(2001)による「てもらう」の二分類に基づき「ていただく」を相手に対する働きかけの有無によって二分類し、その意味上の二分類が「ていただく」においては尊敬語との互換性の有無という性質の違いとして表れることを示す。すなわち、相手に対する働きかけのない「受動型ていただく」は尊敬語との交換が可能（尊敬語での表現も可能）であるが、指示や依頼など相手に対する働きかけのある、つまり相手への負担の大きい「使役型ていただく」は尊敬語との交換がほぼ不可能である。最後に、こうした「ていただく」の振る舞いは、対人上の配慮に関する語用論的な制約に従っていることを示す。